

群像 創立者18人はこんな人



いさぎよき創立者最後の学長



おく だ よし と
奥田 義人

第2代・第4代中央大学長

1860(万延元年)～1917(大正6)／鳥取
初め留三郎、のち義之助から義人と改名。藩校尚徳館に学んだ後、いく度かの転学を経て、1877年大学予備門に入学。80年東京大学法学部へ進学し、84年に卒業。奥田の在学中、寄宿生の大半が学位授与式をすっぽかして退学に出かけ、帰校後、他の学生を巻き込んで大学の建物や器物を破壊するという事件が起こった。明治16年事件と呼ばれるこの騒動に、奥田はさしたる関与もなかったが、最上級生として自らも責任を取ってあえて罪を認め、退学者の筆頭に掲げられた。処分公表の際、最初に「鳥取県士族奥田義人」とあったことから、奥田の名は一躍天下に広まった。のちに、文部大臣・司法大臣・東京市長などを歴任し、男爵となる。英吉利法律学校では、組合法などを講義。



豪放磊落な知恵者



え ぎ まこと
江木 衷

1858(安政5)～1925(大正14)／山口・岩国
岩国の私塾共学舎に学ぶ。成績は良かったが、今でいう授業妨害を繰り返す悪童だった。その悪戯ぶりは後年も止まることを知らず、内務大臣井上馨の秘書官時代、遅出早退の大臣には高級な椅子は無用と自分の椅子と取り替えて、大臣の怒りをもってどこ吹く風と澄ましていた話など逸話に事欠かない「大物」ぶりを随所で発揮していた。
茶目っ気のあった江木は、井上ら同郷の長州閥の政治家に大変気に入られ、秘書官や参事官として側近に仕えた。だが、法典論争では政府の民法典を徹底的に批判し、その実施延期を主導する中心的な活動家であった。法典論争が実施延期で決着すると、江木は官途を退き弁護士へと転じ、刑法研究に心血を注いだ。英吉利法律学校では、行政法・刑法などを講義。
詩文に通じ、名利にとらわれないということから冷灰と号した。

1894
明治27

1894
明治27